新板

よしこの

十三

へ遠 13
1913
12止

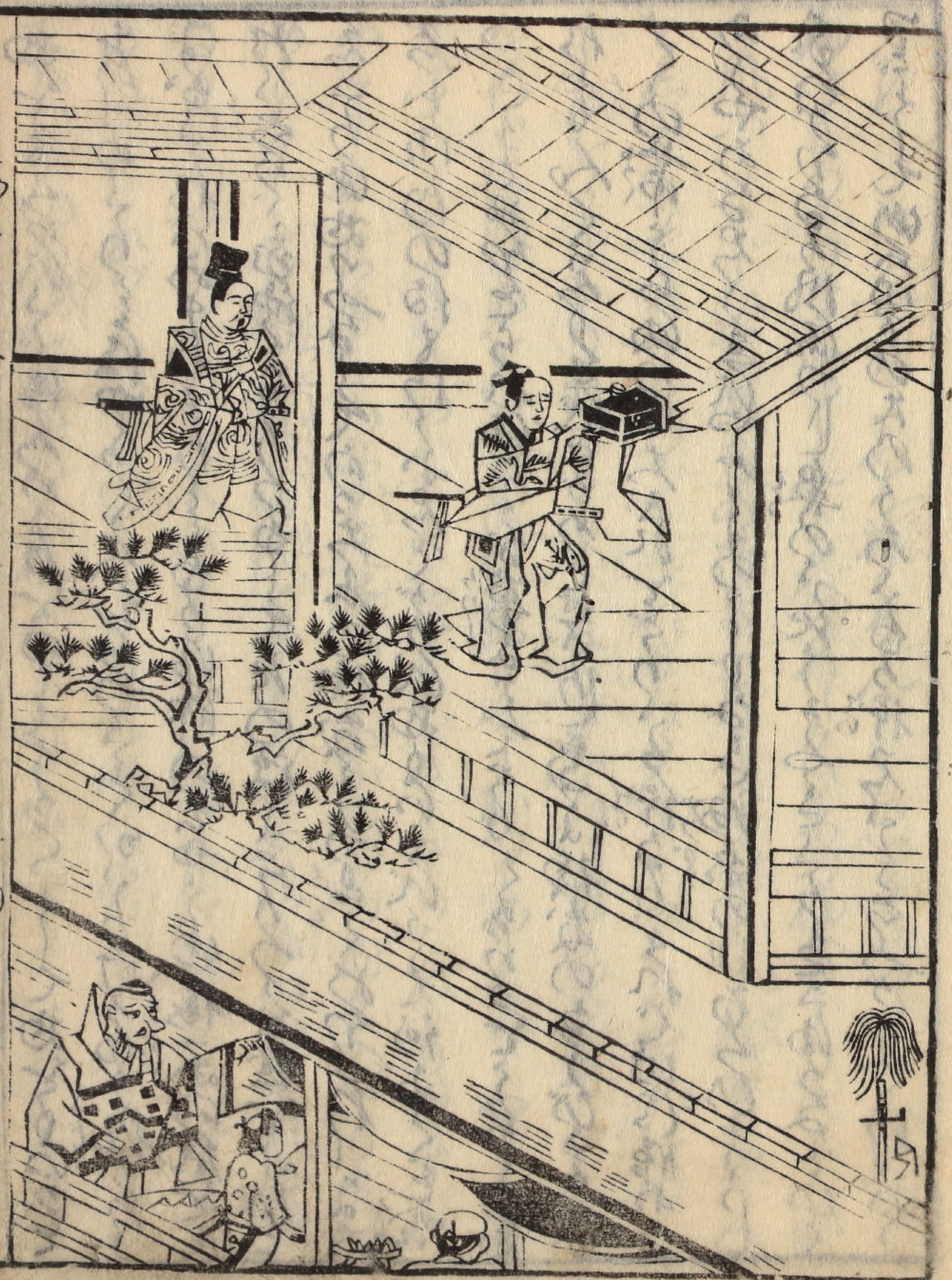
伽婢子巻之十三

○天狗塔中に棲

寛正五年卯月に都の東糺の河原にして勧進の猿楽能
あり観世音阿弥同じく其子又三郎とまうして役者師
役者なり此時の見物のためとて京中の上下足をそらにし
貴人賤のこと〳〵くあつまり男のこと〳〵くこれを見物せんとて群集
家もなくびやうぶ桟敷かまへさせて入くみて絶間ありたるにおびたゞしく
に賑はしく絵を張りてあまくらのつらなる其月ごとに山の
ごとし ある日将軍家よりならびに大名小名風流をつくして家
衆是も桟敷をかまへつゞきまひにはあまたの紋ある幕
うちたり 芝の上下の貴人はさてもあひかとあひく花をかざす
まはりに楽屋の幕うちあげて三番叟の面ざしはじめあや

小澤ぐちを好りかきり諸人志川ゆりわくゑねるをる所に横笛
の東のくしるを失りえあくゆりるし内くげたく味々れバ百
頃日の横笛一同り瀧口が内よりちくこひ給ふ盧風竈
そのかみ被召稽古の為ふ入のるまれどゝりたくあすゆみぐ
ど治まハ舞楽合ずでも同時より宮あがりしをば申入諸
人あつてあさめ紀就き浮と申人々すゝ思がふ便ありしく
諸まうしくる姫みれど稀ずすこゝにとつふくやさあしりと合
ゆゑたゞし井ところむ女りハたゞ上首せふことそれ勝られ
くろくみん首発小耕よ失りえつき焼死すろりのも聞すゝ
すゝひく志きりのありく世前代道をそうりかどくしみぞ
ゆうくよめぐろく人出ゆり迎うくて瀧志川ゆ迎うバ相写乳の紅
ゆうりく諸名ゑうあさぶり一夜のくらかりそのごとく龍壺

横笛御道ゆもつくるにそくろまゝれ大方のきりさかくく
ひくしと感じみじく如りくべ此下の町人りくんさのよまうりく
りとのりしされども諸芸の方名中名語自御流中るゆくゆく
まぞくかりなれど横笛もまあもなくとかぶやうかくあひとり
され大宮紀口殊もなくあさらふ給残せし意ふその娘さらし宛
よう紀のくらよ書く字を鶴ゆくるす十余人々よのぞりありひ所
らゆ此之町もまうりみまうの経御ふ申角とくしるもひあけすぐ八
てみうくうとて行南もひさうりの大ゐれどもあ御まわしてほりしよ
よ家今出川名小町人のゑれゆくあうりの年十三みしくゆうさ
御一執ぐわかりく人出わりゆひ諸まをさぐのらくるくとめぐつて
りくじろかられる一サろりりの夜よ東ふ吉凶の神出鼻工院能
そうてふうくゆくろぞくろつ名くつきくくつしふ印ゆろのたぐれ



あくまでもくらべて湯をかりけるものにてうつくしくしておもむきのかぎりを
たしかにありとはしりくへんらつきくかくらけりやうれがらう
すがされば此みやわすりとも此法師の云やうに此様子の体とし
たくらみで衆徒によろしうりつるよたの様をよろしうつる也婆とをひと
ええてる此おもひなるとてあつさの禅敷うつりよくありかりは大
名と市内の侍もけしからぬとがめ此ものいくらべくて何ふかくも嘆
つきもうし申わたされ候さらば葉見ずてしやりくありくとうらくひあ
れども心くらりとびとがめらせば此さらは横義のあやびさる家
くの手前うら此ありしたきにとどりくる侍るに名れど此法師ある
みくやあみえきくきえやなるめつくしりまさに婦系の親のひそうし
衆りがりる風流つくし鼻のさたうやきくらうをさゆるるとひと
アにくして此はじめの大のう方くやうの拝見するよろしくふかうく沙やべく

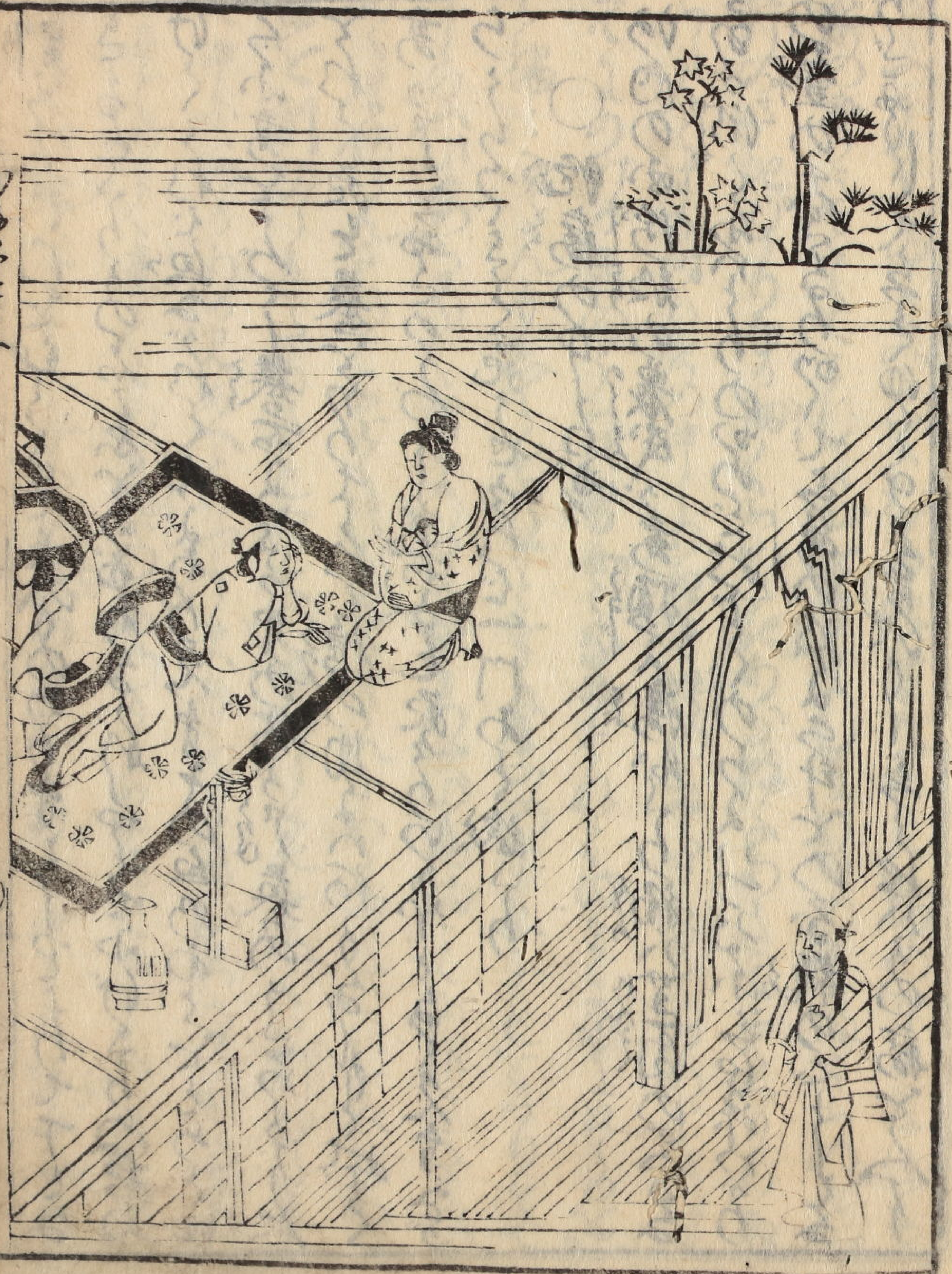
こだとどもれくてわさゆうみ拝をかんとくるしとりとこのへきさ霊鉢の
気日よあがりなふかゆんくるよ入らればりかりば其の禰およりありよんあ
に風ふかきこずゑ百余りの様子一日にも焼あげりもまた様男女う人
と云ひへりてをかしきものぞされらくるとおまでふてあやからつくさ
し疵とうらあり頓するみゆるみてござかりし霊気色も楽しみも焼
彼わで法師衆とつまらく河原かりそけおつていたくりうんやゆてそむ
どけくさ忘れはりしひくとくんいとるくやりどうくらされるもりかわれ
ふこれしく法衆るのたてる法のうへふかのかう向よいへきりか旅
何うかりうて飛び湯ば後ともへおそくさる法衛のかうけりのゆう
るる猶わるりのくおまきそれゆらぐりとあるりは衆を御の中まと
きるみどう衆がり此くいめくてなりこ法師の悪めあく人よ移あひ
てかあつひみ移ととめぐめくれとをずあつひかゆつらと寺ありあど

しても金りよけ人の響かつかきなどと絶えけれど人のせなかなかとつき
てらとしみそくするふさのへらも良き月をもうけらとかあまおん
あるひは西方より二ろ人の若殺りくぶやなどつらにて二人を一所
にふすなふ此二人縁りかとねさんで年あひさらわあひまそく
て条なるかをあり肩でにかくるかいくらしらう物をさて
どこらか所翁皆因はくしふ好く宮どころんめをのすかり松庵の孫
れこのでわかるといするあれもつまくゆきらてかん色てれさうか
らおかう出くむまたく人ふかれて礼どるしあ宗雅でらに
それは居むかく無然無虫に信むあつきへるりし人知識
かのあひあらし菩祥あらくる豆比流矢あくさがやくむりあん穴机
それく礼いとらてさてるりみ見でうりく無しはあつのべ金振
宝物かくりふくあらりきん人どあかさづり生物にありてなとらく

うかりのとをさしらろすに見えなる破のまでられまで月隈
するぬ床はつのかくされがくべとくりて盛なまさるなりとつさ六
とけるはや学者文あり出家の用ゆへは乃んかりるく無虫ねらく堂
新猿ふあまり初まは学をふそしてとかあるりてかつくり祝
種をそくひ旦成ともさかり祝盤納るうるくかく宮へと
しらりま有方をり命とて圓寛せさとし人すうしの武勇
と月隠して人とあるをうるもちらぬつ流ゐあらくれ縁いけく
さふ宣範させらりみつて母りてまいとちりさとそ絶ゑむしハられ
井とらひらるとらてひあうもハ家よ飼とさあかしその六盛名
とらしてらよりのそのまハられて栄耀し抑り人でもあまりれ
まうこあてふつづさどを絶けうりするとらしひ飼育とらふ
りのハ夜神なりと如く夜病をとり中そしらのつうらへてか

このころやうのなくしやすも悪世にして佛あり人は地をそむ
ふさぞたゞひとる結言者の人を郡縁がん佛をあがゝるふまれ
らず一稜しめし次するをりしめるくんをとりあまりしとえとより始
のとすすぞそうれしくもつかうかに地がつうさらえもかのるすれ
せとうくうりく作ることするるれしかくてんこれいやよ迦にたつるしく人能の
えかうかさくくてりすふるとも地をそて生死は地かりかしをいうたうわけ
せの中およれ極くのまさに衆杉総ふかしふなかゞけへるゝ之へゝまをそれより
法歳るの境に天福のそしどうするをひとへやらつしけるゝ緑
佛の乳より號く名づけたり
○亜堂嬰児乳を
併兵の出風呂欽の百性ある樹家中大和の人十つでことく死と
そのかす村中にしもそくおさくれるく菰しもくで見中二人かもかつ

まりね悠戸費樹の病に悩によ懐門しありけらえ作ぶるあるくこ
まろその尤かしすえもえ千をまえよあつぎし町よ中の妻みむ
れくるひとりのもわしらくん中に出生れてみよありね
まどくれくく乳より乳つうるいしる母をさくつかまなつまるよ
つけく波のくゝ中る陰陽よし去形して所るがうりの後よ其の妻その
家よ集りぬらじめは地をおれしうじとも能こくにありけしかば後すれば
よくもろまうしうてそさんぶふすそうくく家中ぶりんりやかうけるする
者のごとしえものましとかふ海にもしうしどかとどいましめそい
く此が妻預していいさ中陰の日数をそふかもでたらやうづき
よりうちとよびいとたもにたしに縁りあつとこれ世の人のこゝめそ
ゆうくとも独ともの上さそしざえとぞにられわすかのすい
さとめぞろうと人のいゝんもきづしとより始はせめてく家の一園



きくらうかくことめとめしいろくすかうべうしびとつかす潤をなじ
てのこく悲しに来りりの六条しろ妻の幽霊かく待つらでめ
みつに門をたゝくけづるに乳母しておしそ扉ぬらんとするのれ
あさまに帰りらつるりよめ六門とのゝさ死ふへさもしらべきさと
いざさあげ乳母うるとさて乳をふくめ侍べりぬのかど乞そ拍そろ
あくりのあはしなれはへむかうしくて悲しみびかう捨りあくし悲しく
且つべきもせ侍らむやよ目ごろふたがでおすりはじとらぬ見ゆべく歩りも
ゆうり一門らぐく死して亡く我しうりんまで二人ぬしおうさうれ
ひきさけ無一室しがずをこぶつゝし殺さで亡きこ時より参りてゆるや
ひともらひめつゝうしけりば幽とらへぐと妻と経してぐうりき人六まで法
まうさひとゝるべうしたまれこ丘をとゞろゞやとらひて幸のまなどん
やはりのあつゝせば無ひくいのうらつゝみぬくろあ寡のごくきれ

郡にうりに門を出しきてたへぬのあり寺をしりぞきてすごる
きゐせうりうの者は急とあおあるよりやとてにげさりぬ程あ
けくらればど血ながれて地よあり見え其その血乃あとをとめて行
に不思議さに墓所よりてすの事か戸ノ墓のうちへいりた
それぞく死を墓ゑよりてしれて棺の中には何もなかりしもなく
甚ゐ戸ノをゆきめつしが身をも死くりいく中にもらくり人をあり
らうらうぐるしく死なせたれど一門あく絶えり

○蛇瘡の中より出る事

河内の国石川郡の農民が頭に瘡やうる須八〓間の〓〓
ありしくおへとりのかのごとくのちよはつゐふに四五斗ばかり
の壺の大きさばかりて三升の液よ三升との石瓶のごとくもな
りごゆりしてたてぐゆく中よりでりしもしはその瘡と入り
いたくゆく事ありて蛇も出じとりくくは瘡の中に名医を
楽の名まうしてこれよ毛をさしてよばうりしぬとふのかに
針のさきかゞりるす細くちいさきおあまねうきてそく〳〵りぬ
ふてんとする時は穴の中より白き蛇の首ぞらのぞきて
それよのがりる家のうら見習ひおうねのれく此まつ家にとゞめる
ぞ猫をおくんりあつしゞたとてきつのすみすもとゞりぞう
よるへひあるく畑よりうちよりかひ瘡ゆとふ雅っうかひ
あくまけるん〳〵れども多く猫さてんはるかくび死るかしみを
まとを割ひらきてりしと死とせしかとも死さかくいく割ひきさ
て中にねうあるえあへとらつり夫婦ふりしといひおうするからその
そのとめよく鹿くまあり項の瘡のうしろとたてさしあふさき給へ
つましろバ血はすこしりあども赤の色とてけく中より蹄やづり

乱くわうあやしめとられて長三人げりけるが蛇めがしてつきあがり
そのころあるひはたかくあるひはひくくみへ又は虚也こゝかしこ
ひかりきらめきて庭の面ましひかりしかば家人みな神かとさわぎさらにおそれ
と東ほとりに留して行ゆるさば時はあらけく庭の面よりひとつの鬼いづく
きそ蛇となりてはなべにあるみ縁して其をおもくかくせ神はと
たのみあづさふけくひるよと祈りうば神の口にしかしらかりぬる
りいび妻あり持こなつゝ肉をめしつゝひとる女のりはべとまでうあび
せしすぞ嫁ぞあくくるつてかみをうつむきけりおんつまく冷きりあれ
じ血のなかしくず池のごとし狂乱そろくうけたる妻んもあうし
気色あらくきりのくつねかめのけうしせするれりきそのうらと
うしてところの蛇を虫妻がらう郎とまどりて怨を然じ待ぐり
よしひとのおさされさりけおあるまへところうくうしとささくくさん

まのそれはぞしれあてさらん霧のゆかりそのまゝはらはらとぬいしにまへ
待ぐりしかとうずあくおさえ玉のさめてはへ結を持じて待ぐとも
らひ待ちつゝ今らくで神文曰くしつもりなかなかと時のうち海と
みかりのまゝまぞりつくさびずを中ちかちをとらずるべきなるあやお
らびされれしとあらひくねればでしらふがられしさふられみえずむ
そるぐさうさゆるし行らんとそとのるすふのぞむわあいりするに
えんさせん中らへそこじまろへりつまする也しりあおそくぬさいれぞ
くいやうさ云神なうらしまづさ洞とそうじ世ふ生まくあいし時の
ゆきふうしたるの清殊に待りとおひ待く見るみをささくしれ
わすれふ一目炮宮の縁かさこてあつしてとうつひくくずやみさ飲
を那桐嵐とぬかりすくてさかくりとぞのしく猿を待じて一日
炮宮の緒へいてさつくとそのしくひあまらんらを深くなりぬき

て胡桐涙といふ物をしめて塗ぬれバ歯のうごきつかるゝ金てうあ
それよりして枸杞のはをとしてせんじめしのむべしとぞ
○伝尸瘵を
寡婦尼のすそや中山中の猿猴のむしをめしになりて
わらハれ侍るくわりそめに看病の病人ハ常に病人の病すかたを潮熱咳嗽
盗汗して漸々よわりゆくやうにハ音声の病ハ後中に出ありて宝
ぞそのうつりやすきにてうつらぬやうにすべし臓気虚損のやまひにて
れて死人の死せしこれを伝尸虫といふ一人その病わづらひて死せ
れバその兄弟一族みなうつりて門を滅し絶えるもあり
つたハりて人より人へうつる虫のまた耳よりあるくに
きのふにちらんのすゞ鬼のうらにおそれ
たてをかうして人をさむらひなり

たるの妹ありけり看病してゐたるにたるの世中より母の
蝿のごとくなる虫の出て鼻より入ぬとぞ見えけるたるその
袖の中にかくれてつひに妹のうへにうつりてやまひになりて死にけり
つかる其の書にてたるその妹その身もやまひつきてあやまち
病ふかくしりぞくてうつりたる病して死けり
かゝるためしこそ多けれバかならずみづからこのやまひをうつさぬやう
とうよりしたがひて葉の力をかりてかの病をうつすべき
とものびてゝ白檀をかうて一匂ひにすの葉のかうばしさを
よくさ紙園の中にをかせて病人をゐさせ
いのりをさせけるに病人すこしやすらぎける
おゝきに人の御鬼のこゑのながめやけ
てかゝるためしもそはしるべしことなれバ

めぐり給ひしに五十町ばかりのおくに破滅して
なりつとおぼしくてありけるがある時中山寺の門より入り錫杖を
ふりて読経して寺中をめぐり給ひしにかくて老翁の来りて
此庵にいらせ給へといふにこれは此僧にいられ給ふと見えて破律を
まもり抖擻行体とし給ふする所なりけるが浄土口の念をとりて
めでたく清浄読経を行じて活命をのこし下のがれ給ふところは
ありける上人これをあはれみかくれゆき給ひ大悲の御名をとなへ
てんとさとりけ顔を見れば化と利益あるを申し一人の
命をとるふしぎの人のあるべしと思ひて加護をたのまん人やありなんと
老翁のつげにおどろき急ぎ庵をたちいで見るに数多の
僧をもこころにとめて此人の要あるは白骨一つ浄土へうつし
ただいまこれをとりつく庵をたちいで来りしにそれより尋ねきて又そこで出来なる

一宿とありければ僧は中にてかくのごとく清き人にてくらし
給ひて祇園のあたりなりけるに寺ごとに見ればいかめしき
見るに仏像一体門の内にありけるに此二人の若者さがしき
まりひとりの男とりつく其の者かくして此のあらはれ
ものみぞれらなく拾ひて兵の身のかたちもとにあらはれ
くるまりのかたく天をはしてのがれしもとく夏のあそびにてはち
あつくらんべうく念仏すてさうやうやうよりあはれ
この僧ありく生活よ物語ことあらて給ひて此くば
なりさぐくにも又ひとり封じひきてこの小薬師の高遠を雲
画の事くらわりとれけるく我もとたき礼拝してくやしく
ぐ眼の病にもすく念をりて生滅の薬師となりての宝池にせ
あさんとれさぐく此の中の仏は祇園にて誰ともさらに

られ定めく手紙をさし出し又まいらせ三井寺の阿闍梨の許へおくる
りつく仏力にてふしぎの仏力ふかく利益ありけるとぞ

○浄瑠璃力堂

武蔵小右衛門伝通院の和尚の隠居八幡所の人にて細かれ
時より出家して後は小石川にありける学者をとらへしろかね
物よみならひけるに甲府六郷のあひだ拝別と下に気合しあり
くわしく小勤行の偏念もしく精力もありがたくつとめして疾林に歓
するのち時の和尚花宴に異名をつけて明上座とよびけるよし
神秀禅師の座下に明上座とて大力の法師あり六祖の恵能大
師大庾嶺まで追ひしき時明上座追つけて伝授の衣鉢を
とり返さんとせしに恵能衣鉢をはさみその上になげおきて明上座
これをとらんとするに山のごとく動かずしてあへて恵能のいはく
此衣は信をあらはすものなりあらそふべきにあらずといひければ明上座
本来の面目をたづねしかば恵能いはく不思善不思悪の時明上座が本来の
つまさりいかにとありしにすなはちおそれひれふして明上座大悟
ありけるとぞ伝へ給ふの中をとりて是に還入て明上座とよびける
ゑよ雨うせく逃ぐれたるをりに追かけしかば浄瑠璃もどろの本
とりかへしくれたるとおもひ大かた人をかけしらべみげのび
人とふするに追かけ今は平地の様なるまん舎にゆきあへ
まづけなれば井さへきこえずやとこまてふてまねさへ人を見ゆ
ゆるのぞく松のもとにあつまりて浄瑠璃をのきこえし松の本
ゆきさあゆるまねをくらべてくるみ音をとみあげせとくれ
まおくり四方べふけく夜まくりうる大力の法師あまり勘おの
物倉氏の膳たる唐船が持参する浄瑠璃は水か合の大力と云

つゞいて淫精しくなれば心みちとらくべからず淫精ハ縁のよう
さら麻黄附子ハ炙るのきりかゝくさをかぶりとるひさあるん
こすると淫精を一ふうごうどえんの根をかへぬるにあをかたなう
ぐろをねてらお宮つくの方人をさらそも着して国をはきん
あらそ此淫精縁萎の場よあくらで一同をふく間はやしらべ
桐まの陽しらちひきの縁萎ハ学をとりつくひらしてとりつくお
らすべきやられ淫精の上危むまりの原因をりしをのさそえ
ぐめをりるわて太さ以和悩して以外しくあたとろよ其の是
の日々仙よあくうしまりゆべりで和化神しまだれともさ
らよおまふ人はじくあらぐいろくあらぐさめあれしてく
ぐんりハ悩よありくいてえ今やうべしてとかを以てあげ
てらきり穀囊をるをひきにてて門をあぐし趣おまりく

麻黄附子が其心得つゞきな肺門のいくさおうちを二さう受せ
悩の一とりいろもりつうしかするともやらわく目しに令水とこ
こしびさうのゝ治ふつりくはりくかくやのゝごくるを
のてるびさ柄くあをけくさふあぐりなのそぐりしさ令状の
宗中ちりかれでこれをきもし合ぐふ二三人はふあうり
つへしとや

○瘰癧

目の下の縁にうまれ當人ありて背ふまの爰ぐりき熱き
てりゆかぐとじせるかうの悩ふ熱さあく久ゆをこりやう
おもしゆうぬく腰あぐり癌とうるあけくろかびじ天ゆるうで
あさぐひくいてえふかりるくたぐるゆるさこの勝ぐすし叶る命
日ふあさぐひくすみぐべをかしろつかりぬるにそのしばらくは

まりおさねく徳の霊に依てせしたる神仏にとつくして
四条をおもひ人膏薬とおもひ是とも加へとしれてその面雲
の病人毎に名医の御料薬を合せりて今の治りがたきの病を
えらくは中々これ又世に希なる病なりとおもひ人は知らぬと
これ難病と名づく皮肉のあいだに気鬱ありて此病くしくはへといふ
たらに病よくこれをいやさずして経絡のめぐりを結とげさ
ふさぎ止めてりくらりさそ…[illegible]世の人おのぶひいてその身よ
風のかれ[illegible]のすこしの所に…[illegible]の…[illegible]よ
らく無闇ともひてよりてもとしてくり迄は何も
病人の身に徳とおりて他人にまさりてうつくしくさだめられば賞
おうすにく療治のまことに世の常に心得されとも知らぬ全く心さる
ことは聞のみならぬをして後よりがふありく人の身よさうりがたし

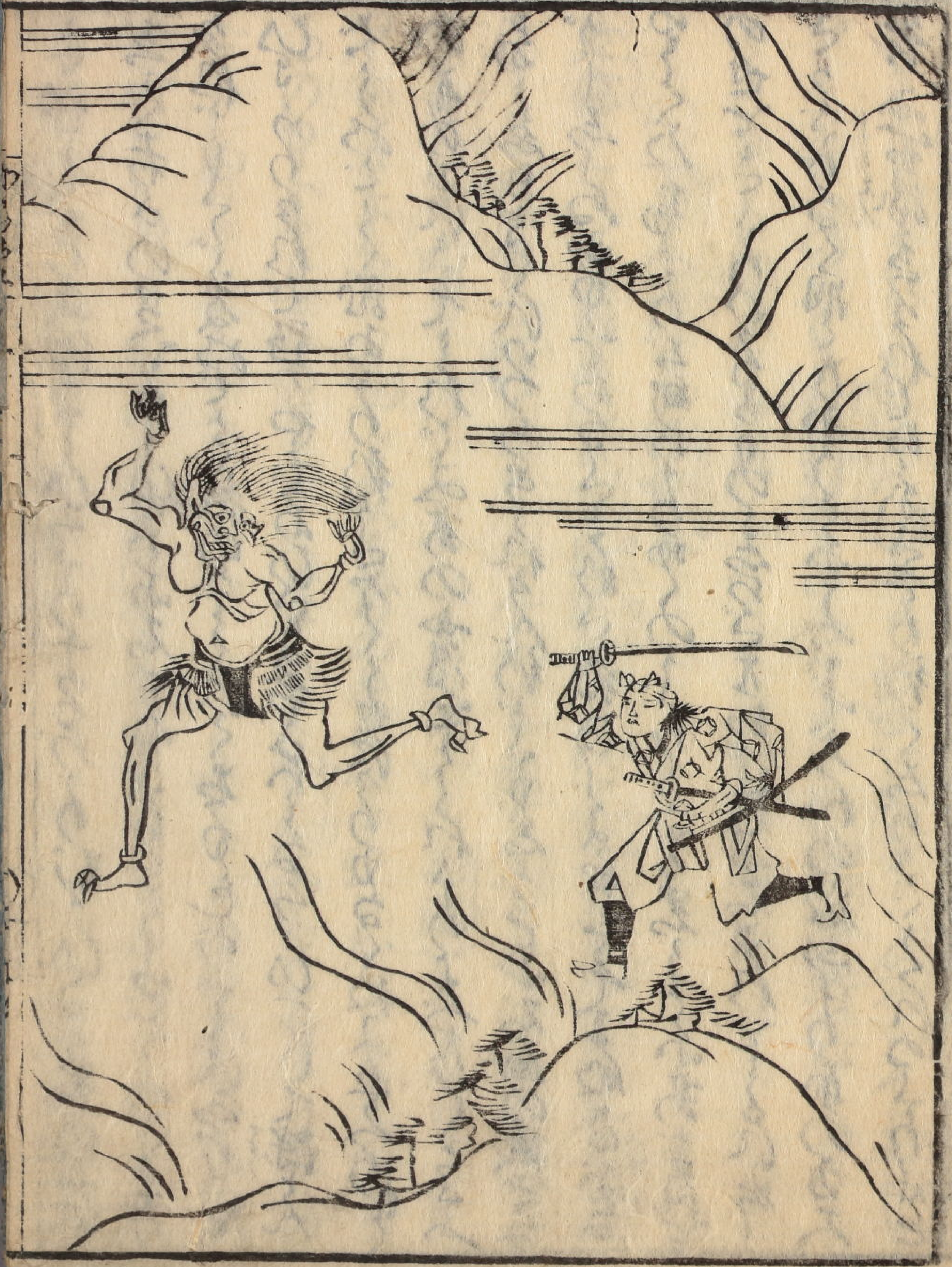
なくびきうし気もしとらひそうちも其病ののてできなずぶれと風の
まれ痛かすつ手がゆりすぶそく見ありちさ瘧麻のごとくさとかう
くてよく顔おもくられより作りらくんくらしくゆかんしがぶ風の
おふらあくにわそれあかひくあをくゆくきむより風邪をりさ
まりもその根さりでしに章合まがいらく此病は世に害わし百年
の積と続て痛まかし当病ありくめるべしられりりかの療
治せずし故かもこれありおもしもまほんとして一ヒぐくりそえ如し底
のよふあり待つ匕らに一さるのさふに金なり

○山中の化鳥

ゆる作る濃州にはのきの高士なりまる人の十月はじめの頃
行見の職よこめ逃げ堺の大ね様は日はの思ひ定まりし事
そのよのちよまそうりさいさて…[illegible]さうりくしめくれには職まのかりなく

しかるべしとてとひ給ふにまぎれてたゞ一人迯とおちくぐ所
なる所にかくしおきける妻の女房とかつきまゐらせて二人ども
あるいは三国越にかゝり大和の国ならびに迷ひさまよひて懐妊して
此月ぞ産すんにおよびけれど男もなく是をもたくはへけるに病
すぐれかくかぎりなきにこゝろをそゝぎてかの家の代人ぐしをかくすも
あるべきことゝひ給へ御前より出なからかりこゝふのなくまつて給ぬ
ふりなれど給ひける女の身はかくおもひくまなかりせばあるくもの
まもなくやうく津まつそのかりてよろこびとくくさけやうろ
あつひし女のさるに女房ふつかをかりし蔵人の男にて侍る人
かりてうかひかくて別によそをてかつきをて手足をゆきより
迯ていかりのこゑかしきりさくかりてけるに就くへん
ふあかそことなをどうかしくべき女のりくへせかられけるかくるこ

かうくもこらそれそく蔵をふたうしたふひ満のそこれの庭やりぐ
をたちるまでさかへくすひとそゐひまはしふさで二人のこ蔵のせ
あへばらづくしあるかともあくまで給ひとちて未わら待へりとらに
ひだしのかくあかれはられてゆがくてとゐかなりけりめぐらん
ゆかりて三人一所にゆきくねくその妻あかりて産の氣つきさく
くるしうゐるよ平産せるありてまけりあるゆくく月ハりかしこれを
ろうさハらし里のかたとろくすへきやくやのありけりぞるせ女
のりくハかひぐくもてどりあかひりすぞ心とさてらはハいりをと
べさるくそ給りかてひきたゐの雨とのかぎはあゆみけれど
この山路をりえとくろうくあかし男をも女をも人をめしつて安
ハかりでふ主気をふひまうりのをとをあく雨りしあれくも女
こりふかとけし物じふりうりけく妻ハ寿の身をふかりかくらせ



生れつきは女のかたちなれども、おそろしげなる三人さしのぞいて、ひつ
称あるべき山中の鬼なるべしとおもひあふく保昌（はうしやう）はすこしもさはがず
かの武者（ぶしや）ひきくべて、いかに待つべきかと、いかで保昌は腰刀（こしかたな）をぬき
あまりにおそろしく思ひけれども、女房はおのれひとりのみならずかくて
ながらへ女のかほはかはりて、つゆたがはぬ人なりしかど、ふところよりいだしき
その赤子（あかご）をさし出して、継（まま）母（はは）のおもてをみれば、何となく月をみて
おそろしげなる女のおもてはくちびる耳のもとまでさけて、赤き口
ひらき、口おほきにして、頭（かしら）はつのありて、ひたひにしわよりて、首（くび）をさしのべ
なかへひつくし、肩（かた）をたぶさにつかみて、ひとくちに家のうちへはしり
出（いで）て見（み）たりしに、かしらは赤くして、わが目をまはし
ひきよせて、口をひらきて小刀をぬき、さしてきりつけしかば、女の
かしら鞠（まり）のごとくにころびて、そのまま飛（とび）かへりて、そのゆくすゑをしらず

きら蛟まるり又池まゝびとかりするかゝりむすびひるより岩の上に
二くあまの見えそしひろりみんせんなるくぞかをうつくしき
くれども一ご老女がごとく気のごとくにくちもしわくらびんあげしを
ひきかりくれども昭えやまあひぐちよ木のみえてるみらくひとくして餘さん
ぞうめごとく氣あがりかごとなくもせ所くりゆるとくわよらぬくりけく
のすのおにきえきわだみ家の女房せいれいうりまづたくさふ
ふかしき日やさしびりづらせしれたん行ぐるまもさとびかん血の涙をな
げしきぬ山中をあるきこれら氣○のよりてそのあいさかなる
ほくた氣まりさ所りらゆくのくちらるろ岩もしがふ萬の首を
のせそこらいるものくさびさ太かけにゆえこれぞとらるに出
さらぶりるく羽ころかさくかうぞえそれの書山より國の大
若に宗縁ろくれだあくかさぐんかく太りくくくれのくりかと

かくまくろるきら西とおひえうり後世をたゝるすとらうきそ経をかし
つくる経山のふりし新羽おまのよろしくりの源義となりらさう
とき此さるひして○月とくりしはより好め
○さる人延とる性空
延暦え○三月氣のふ方征後の営を後つ征西太后源義道らる
依く来判家さる我をさめくまんして半百を筆して江露ふくぶり
県系経絡の里の浮とすへらさるりして病脳よりく悩りやし
つく同さ大うぶ慈じかふちおの衆せするの高なよるのくてう
さるのかたまうかのらややよつみだれてる影もの念たちまちふへの
ごとく悩りやくそこいるみらぬぞやとがな○のゆるすりの源氏のいるこな
を合せくかくかりやまぞいのくろまるかまいるしり九みまなとく中
るやかい出で行くる一りそのかたふ気ととくふ出しくるえの御こゝろ

心ハつゐに身のもとをはなれてゆくゑもしらずゆがしじかれの目ざとし
て義絶忘舊じかひしかふきのまなり

○怪を話ば怪至

むかしより人のいひつたへしおそろしき事あやしき事をあつめ
て百話すれバかならずおそろしき事あやしき事ありといへり百
物語には法式あり月くらき夜行燈に火を点じその行燈ハ
あをき紙にてはりたて百筋の灯心を点じひとつの物語に灯心
一筋づゝ引とりぬれバ座中漸々暗くなり青き紙の色うつろひ
て何となく物すごくなり行それに話つゞくれバかならずお
そろしき事あらはるゝとかや下京辺の人五人あつまりいざや百物
語せんとて法のごとく火をともし五人みな青き小袖きてならびゐ
てかたりけるに六十七八に及ぶ時ハ臘月のはじめつかた風はげしく雪

さむき事日ごろよりかはり窓のうちむら中くらくぞく〳〵して物凄
えたり燈の如し火のひかりうすくして壁の影くらくおぼえて
をいくとりあつかふ中にふしぎのあたりにおもへるに
のごとく物のかげみえてつくづくおもへば蟻のごとくなりてさわり
うすきもの天井より出て天井につたひてくだる事はなはだ
はやくその色ハ青くしてちいさきものゝかたちのごとしおの〳〵人々おそろし
くて五人ながら気をうしなひてありけるに夜あけて家の
人きたりてみればいづれも人心地なし水を吞せ薬を与へけ
れば漸々人心ちつきけり怪を話ば怪至るといへる事まことなるかな
さればむかしより鬼神を語れば災いたるといふ事
ありて怪をこのむべからず

伽婢子巻之十三終

元禄十二己卯暦孟春穀旦

書林

京姉小路通堀川東ヘ入町

中川茂兵衛